



「図説 脳卒中のリハビリテーション」

服部一郎・細川忠義 著

(B 5・125頁・57図・1400円 医学書院)

多年の経験に基づく独自の実地書

東北大温研 杉山 尚

畏友服部一郎君が最近医学書院から細川忠義氏と共に「図説脳卒中のリハビリテーション」を出版された。

同君がわが国の数少ないリハ医学の先覚者、開拓者の一人であることは周知のことであるが、特に多年の経験に基づく独自のリハ理論と手技を展開されていることが特筆される。これは欧米リハの知識を吸収し、消化し終った者が自ら打ち立てたりハ体系とすることができる。この意味で、本書は最近数多くみられる翻訳書の域を脱したわが国独自のリハ実地書第一号ともいえよう。

著者が私に贈られた本書の扉の文章の一節に「私の、学問とはいえない、いわば職人のような仕事を第一に認めていただいたことに心から感謝します。二等兵から成り上った古参中尉が戦争はうまかったように、私もセラピスト達と今後も議論しつつ実技をみがき、誰にも負けない誇りをもちつづけます」とある。謙遜な調子の反面、底にきわめて自信あふることばは、自らのリハを拓いた者のみが言えることばであろう。本書は確かに脳卒中のリハ手技を図をもってわかり易く实际的に解説している。発作から病院の訓練、さらに家庭生活にいたるまで、素人にもすぐ役立つように書いている。そのくせ、PT・OTはもちろん、専門医にも“はっ”と感心するような解説が随所にみられるのは、著者が自ら、患者とともに歩んで作った独自の著書であり、中に十分な理論的根拠をもっていることを端的に示すものである。

脳卒中のリハをすすめるためには、その運動障害と回復の Kinesiology の理論、ゴール設定のための rehabilitation potential の推定の研究、ritk 管理など、数々の基礎的研究と、これと並んで経験を加味した実際のリハ手技の展開との2つの面が常に車の両輪のごとく併行してすすむ必要がある。本書は後者について書かれた図説ではあるが、心あるものには、その解説の中に大きい理論がかくされているのを感じるであろう。

最近、各科領域でリハビリテーションという言葉が流行している。私はあえて「流行、ブーム」ということば

を使ったが、ここ2～3年のわが国のリハ施設の乱立、文書の氾濫をみれば、こんな言葉も使ってみたくなる。確かに日本のリハの現状は欧米リハの翻訳知識と環境のブームにのった施設の急造といった感をうけるのは敢て筆者一人ではあるまい。過渡期としてやむを得ないといってしまうれば、それまでだが、そろそろ地に足のついたリハ医学の確立が、基礎的研究の面でも、その実際の面でも、急がれてよい頃と思う。この意味で本書の世に出る意義は大きく、ことに脳卒中片麻痺患者を直接取扱われている日本人々に本書を薦めたい。

すばらしい脳卒中の解説書

新潟大脳研 椿 忠雄

一口にいうと、脳卒中のリハビリテーションの解説書としてすばらしい本である。著者らは医師とPTであるが、いずれもこの方面のベテランで、協力してこの本を完成された。服部博士はわが国の脳卒中のリハの先駆者としてあまりにも有名であるが、本書は同博士の長年の苦心のすえ、卒中発作直後の処置から日常生活に適應させるに至るまでの患者の取扱いを完成されたものをまとめたものであろう。内容は実に懇切でいねいでわかりやすく、図解をもって示され、各所に実際に当って苦心された跡がうかがわれる。本書と類似の試みは米国の学者によっても行なわれ、これは既に本邦でも翻訳されている。服部博士の方法は究極的にはアメリカの方法とほとんど一致したものであるが、このことは同博士自身驚かれた由である。本書の一つの特徴は、わが国独自のタタミとフツンの和式生活に適應できることである。

本書の解説はわかりやすく、医師や理療師はもちろんであるが、あまり医学知識のない家族が読んでよく理解できるので、患家で一冊備えれば十分に利用されるものである。図は豊富であり、麻痺側は黒く、健側は白く描かれていることもわかりやすい。各部には、細かい分類がなされておりすべての点が網羅されているが、このどの頁を見ても、著者の創意がうかがわれる。

本当はリハ関係者はもちろん、卒中患者を取扱かう医療関係者、そして患家もぜひ手元に置いてよい本であると思う。